

古代エジプト最後のファラオ クレオパトラ七世

CLEOPATRA VII

古代の女性の中でクレオパトラほど、広く世に知られている人はいないでしょう。絶世の美女として有名なクレオパトラ七世（紀元前六十九年〜紀元前三十年）は、古代エジプト・プトレマイオス王朝最後の女王でした。

「クレオパトラの鼻がもう少し低かったら歴史が変わっていた」という言葉が伝えられています。クレオパトラは軍人や政治家らを魅了し、治世に利用したともいわれています。

クレオパトラと三頭政治の一頭、アントニウスが出会ったのは紀元前四十一年、小アジアの東の果ての地、タルソスでした。クレオパトラが用意したタルソス行きの船は、紅い帆を張り、船尾は黄金で飾られ、櫂は銀でした。漕手たちは笙と琴を伴奏とした笛の音に合わせて漕ぎ、クレオパトラは美しく着飾って、金糸の刺繍が

施された天蓋の下に座っていました。それはまるで絵に描いたアフロディア（最高の女神）のようでした。傍にはアフロディアのおつきのエロスの姿をした子どもや女神を思わせる侍女たちがはべり、薫香の香りが漂っていました。

アントニウスはクレオパトラに圧倒され、たちまち心を奪われてしまいますが、彼の心をとらえたクレオパトラの魅力とは、一体どのようなものだったのでしょうか。著述家プルタークが著した『プルターク英雄伝』には、「彼女は人と交際する時には相手をそらさない魅力があった。その会話には説得力があるので、彼女の姿かたちも同席している人々の心に浸み込んでいき、鋭い印象を残した。さらに彼女の声は甘美なムードがあり、多絃楽器のように、巧みに数ヶ国語を使いこなすことができた」とあり、

容貌だけでなく、知性や優雅さといった内面の美しさも備えた女性だったことを伝えていきます。

さてクレオパトラの時代は、どのようなお化粧やおしゃれをしていたのでしょうか。当時のエジプト人はとてもきれいで、肌を清め、肌を柔らかくするために香油や軟膏を塗っていました。そしてこれらにはさまざまな香りをつけていました。また、肌を彩色するために顔料や染料を用い、女性は肌を黄土色にして、明るく見せていました。

メイクのポイントはアイメイクで、コールという粉末を銀やガラスのスティックを使ってつけました。コールの原料は緑黄色の銅鉱石やアンチモン（銀白色の半金属）で、アイラインには黒や灰色がかかった緑色を、アイシャドーには緑や淡い緑青色を使用しました。クレオパトラは眉とまつ毛に黒を、上まぶたには暗い青色、下まぶたにはナイルグリーンを使ったといわれます。目の上のシャドーは上まぶただけに塗ることもあれば、眉まで塗ることもありましたが。

当時のアイメイクは、装飾を目的とするだけではなく、日光のまぶしさや砂漠のほりから目を保護するという薬品のような役割もありました。また当時の人は、魔ものは目から入ると信じており、魔よけという意味合いもありました。「魔もの」というのは、蚊や蠅を指しているのではないかとする説もあります。

基礎化粧品も充実していてパックも行われていました。しわを取るためには香料、蠟、新鮮なオリブ油、くだいてひいたシブラスを牛乳に混ぜたものを六日間、顔に塗っておくとよい

とされていました。つづいてヘアスタイルとファッシュョンについてお話しします。身分の高い女性は、髪を真ん中で分けてびったりとこかしつけ、その上に鬘を被るのが通例でした。鬘は大型で風通しよくつくられ、地位の表示でもありました。最上の鬘は人間の髪でつくられましたが、木や棕櫚の葉の繊維をつかった鬘も用いられました。色は黒が好まれ、赤、青、緑やその他の色も使われ

ました。また、当時のエジプトのファッシュョンはシンプルで、真っ白な布を身にまとい、華やかなアクセサリーをポイントにして、全体のバランスを整えていました。今から二千年以上も前に、これほどまでに美しく装う方法が整っていたとは驚きです。人が美を追い求める気持ちはいつの時代も同じものなのだとしみじみと思えます。



古代エジプトでは、アイメイクが化粧のポイント



エジプト新王国時代（紀元前 1570 年頃～紀元前 1070 年頃）の「化粧料入皿」